

子ども学科保育士養成実習教育システムの開発 : R&D、QMの諸概念を手がかりに

著者	福永 英彦, 松尾 光洋, 井上 厚子
著者所属(日)	平安女学院大学子ども学部 平安女学院大学子ども学部 平安女学院大学子ども学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	12
ページ	58-67
発行年	2012-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001298/

子ども学科保育士養成実習教育システムの開発

— R&D、QM の諸概念を手がかりに —

福永 英彦・松尾 光洋・井上 厚子

本論の目的

平安女学院大学子ども学部子ども学科は、2009年に開設され、保育士養成課程を設置した。2010年秋以降、保育実習担当者は、R&D (Research & Development)、あるいはQM (Quality Management) の発想を取り入れた実習教育システムの開発・形成に取り組んできた。本稿では、その過程を吟味し、試みてきた実践とその成果について、特にR&Dに焦点をあてて検討する。1年間の実習教育システム開発により、何が達成され、何が課題であるかを抽出することで2年目以降の目標と課題に向かうことができる。このようにして新たな学科に一定の方法に基づいた実習教育システムの形成という考え方が定着するならば、大きな意義があろう。

今回の報告では、初年度の保育実習と事後指導が現在も継続中であることから、学生の実習成果・評価の分析についての検討は後日の課題とする。そして、本学科における保育士養成実習教育システム（以降、保育実習教育システムと略）の開発視点とその核になるR&Dの実践が、実習担当者会議の場を通じてどのように機能したかを中心に検証する。これらを通じて、本学科の保育士養成課程のあり方、考え方や教育のベースが明示され、実習園や施設をはじめとする内外関係者の評価・ご指導を頂ければ幸いである。

1 保育実習教育システム形成の基本視点

(1) 保育実習教育システムのR&Dという視点

筆者らは、新たな保育実習の立ち上げに際して、保育実習教育システムを一定的方法的根拠のもとについて明示的に形成したい、と考えた。そこで意識したのは、R&D、QMという主に生産活動分野に導入されている運営開発手法の援用である。要は、「実習教育システムをつねに調査的に現状分析し、つねに開発的に形成する」ということである。これにより、問題点を把握し、改善や修正に結び付ける。そこから実習教育システムに新たなテーマや目標を加えていくのである。そして、そうしたフィードバックが自動的になされるような実習指導「文化」を定着させる。その集積により、いっそう効果的な実習教育システムを形成し、本学科における保育士養成を活性化させるとともに教育的土壌を重層的に形成していこうというのである。

(2) 実習指導体制の方法化

実習教育カリキュラムを調査に基づく開発という手法で形成することは、当然ながら、実習教育担当者の意識と実習指導体制にかかることとなる。実習指導体制とは、学科組織において実習担当教員がどのような役割をどのように分担し、実習の枠組みを設定し、内外の実習準備や実習事前・事後指導の授業を実施をしていくかである。さらに、学生や実習園への膨大な実習関連事務が必要となるが、それを適宜・迅速に処理する機能は実習指導室（実習相談室）が担う。実習助手や実習事務者のはたらきと連携が含まれる。実習教育システムを形成するとは、こうした実習指導体制の整備から養成する保育者像、教育理念、授業内容、実習の設計、対外的交渉や園・施設との協力・協働関係の形成、

学生との関係形成によってなされる。逆にいえば、こうした要件をおさえることがなければ効果的な実習教育を安定して行うことはできない。特に、実習教育は実習に至るまでの、また実習を終えてからを含む4年間の関連科目の学習の積み上げ、その体系化・有機的な繋がりによるものであるため、学科全体の教育体系との関連づけも重要となる。しかしそのなかでも中心となるのが実習指導である。実習指導では、担当教員は複数による協働とならざるをえない。実習指導の柱は、担当教員集団の協力や連携となる。

(3) 協議体型の実習指導体制

実習指導体制の組織タイプは、通常、大きく2つに分けられる。ピラミッド型と独立分立型である。しかし、本学科ではフラットな協議体型を形成している。協議体型には利点も難点もある。協議体型の担当教員間でR&Dによる開発的試みを行うために、実習担当者らは、定期的な実習指導担当者の打ち合わせ会議を開催した。担当教員は保育所実習担当者3名、施設実習担当者2名であり、当初、保育所実習担当者3名の協議から開始した。多忙な時間割や学内業務の合間に、出来る限り毎週60分から120分の担当者会議をもった。会議では、情報交換、現状への認識のすり合わせ、課題の明確化、対応方針・方法の検討と意思決定を行った。これをもとに教員が役割分担し、実習実施への実務や諸課題をクリアした。会議は、ときには拡大して、幼稚園教育実習担当教員、教務委員も参加した。新学科での実習教育体制を1から作り上げていくなかで、旧学科の慣例や既存の意思決定システムが確立されていない状況は、変革の可能性が導かれるものの、一方では多くの困難も生じさせる。協議体型の運営形態を作り上げ維持するのはそれほど容易ではない。組織的課題や物理的な時間確保の問題、教員間の意思疎通や認識の共有など、超えるべきハードルは多い。しかし、保育実習という喫緊の課題に迫られ、学部・学科・教員の協力により軌道に乗せることができた。

実習担当者会議の実施状況は、資料2のとおりである。

(4) 実習担当者会議と現状へのリサーチ

実習担当者会議では、決定し、実行しなければならない問題、議案は数限りなくあった。しかし、議案項目が山積する中でも必要最低限の決定にとどめて行われることが多かった。それは、現状について、教員同士の見解の擦り合わせが最重要であると判断されたためである。教員各々の様ざまな角度からの現状認識について、情報交換し、見方を述べあうことを重視した。しかし、重要なことは、それがあくまでも多角的に現状をリサーチする目的であり、実習担当者が個々の見方や守備範囲、責任の線引きをすることではないことである。あるいはまた、教員同士の融和や、単なる情報交換ではなく、現状についての認識を深め、一体的にそれを引き受け、全体としてそれに対処するという枠組みを形成することであり、そのプロセスを保持することに腐心した。

2 養成教育の理念

保育士養成は人づくりである。本学科がどのような保育士像を掲げ、学生をどのように育て、社会に送りだそうとするのか、それは実習教育の根幹である。保育実習教育システムにはそれを具現化する方法的根拠、つまり理念に整合したプログラムやカリキュラムがどのように設置され、実施されているかが問われる。保育実習教育システムはそれに見合うように開発されることが求められる。

(1) 理念のR&Dとは

筆者らは、当初、教育目標とする保育士像の明文化を目指した。しかし、教員個々の見解や理念そのものの捉え方にも距離があり、保育士像を確定することも教育理念に合意をみることも一朝一夕で

はないことが判明した。明文化はさらに困難であった。教育においてもっとも肝心な部分が確定せずに実習指導が動き始めるのは、憂慮すべき事柄ではある。しかし、筆者らはこれについても暫時、R&Dを重ねていくというアプローチをとった。ただし、この点については重要な補足が2点ある。第一に、既存の公的制度上の保育士像や、保育の伝統が紡ぎだしてきた保育士像は、教育理念のミニマムとして十分に有効であること、また、大学・学部教育目標や理念が確立されているため、その大枠は既に確定されていることである。第二に、理念をさらに具体的教育目標のレベルにおとしこむには、一定の時間をかけた内発的開発が必要である、との判断である。拙速を避け、多角的にリサーチしながら保育士像と教育目標を固めなければならない。なぜなら、目指すべき保育士像は、現今の変動する保育理念や保育士像に関わり、また本学及び本学科の組織背景・文化背景に関わるからである。重要なのは、教育理念は真空に掲げられる看板ではなく文化的相互作用により形作られていくものであることから、その過程を無視できないということである。そこで、理念について、以下の項目を挙げて今後もリサーチしていくこととした。

教育理念、目指すべき保育者像に関して

1. 保育所保育指針等の保育観・保育士像
2. 今後の社会が期待・要請する保育観・保育士像
3. 平安女学院建学の精神と大学・学科のアカデミック・ポリシー、キャリア・ポリシー
4. 平安女学院の資産としての伝統：キリスト教ミッション、生活・福祉・子育て支援など
5. 本学科学生の雰囲気、スクールカラー

教育目標の理念化に関して

1. 幼保小の一体性と個別の機能性
2. 地域性：高槻の文化と環境
3. 現場：園・施設から、保護者から、子どもから
4. 4年制私立女子大としての志向性、就職動向
5. 学生の実習経験、現場経験からのフィードバック

今後、社会からの期待に応え、本学科の特徴や独自性を発揮した、例えば、〇〇に強い、〇〇は訓練されている、〇〇の特徴をもつ、というような本学科なりの保育士養成理念を形成する必要がある。

3 2011年度の実習実施概要と結果

(1) 実習の概要

①保育実習実施要領の策定

2010年9月の学科会議において、保育士実習の年度日程や配属園、準備実施の手順、保育実習担当者等が決まった。その後、保育所実習担当者は保育実習実施要領の具体的中身を検討、形成した。この間、関係した教員5名中2名は2010年度末に退職等し、2011年度に新たに2名の担当者を迎えた。保育実習実施要領は、文末の資料1に掲載する。暫定的に策定されたものである。2011年度の実習は、これに基づいて実施された。

②実習事前指導の授業内容

実習事前指導の実施内容は文末資料3のとおりである。実習初年度にあたる2011年度の実習事前指導の特徴は、まずは現場で実習生が用いる子どもの遊びや共に楽しく時間を過ごすための基本保育

技術の習得に大きな時間を割いたことである。実習現場では、実習生が園の子どもたちに関わる際に何らかの手遊びや絵本、紙芝居の読み聞かせ、パネルシアター、工作や壁面の装飾などが求められる。また、実習形態の1つに、設定保育の中で実習生が指導案や計画を作成し、1時間程度のプログラムを実際に担当する責任実習も行われる。保育技術としてこのような技術は、ミニマムな要素と考えられた。実習指導の中でこれらの技術指導に時間を割いたのは、本学科の学生の授業実施状況、保育技術習得状況のリサーチから、補足が必要と判断されたことによる。

③実習の実施状況

保育実習の履修登録者30名のうち29名が保育所実習を終え、28名が施設実習を行っている。

(2) 実習実施の結果・問題

①実習実施上の問題（欠席・遅刻・中止等）

保育実習Ⅰにおいて、1名の学生が実習中途の取りやめとなった。実習園から連絡を受け、訪問指導を行ったが、再度の実習園からの連絡、実習状況により中止を決めたものである。その経緯や指導及び支援、その後の教育については別稿、事例として報告したい。ただ、そのなかで付属幼稚園の多大な協力と教育的配慮を頂けたことで学生の気持ちや学習のモチベーションが保たれている。保育実習教育システムにおいては、挫折した学生への対応もその一環として基準ある対応を用意する必要があると考えている。

保育実習Ⅱにおいて、1名の学生が隣宅の火災で被災したために、実習日程を2カ月伸ばす対応を行った。12月に実習を終えることができたが、実習延期には被災以外にも複雑な要因があり、指導の経緯を検証していく必要がある。

実習の欠席等については、保育実習Ⅰ（施設）において風邪による体調悪化で1名の学生が実習開始を4日遅らせた。また、実習延期・実施の判断が間際となった結果、細菌検査証明書の更新が間に合わず、実習園との相談の結果、最初の数日は一部の業務を避ける対応を頂く、という問題が生じた。再発を防がなければならない。実習の実施についての問題は以上であり、他に実習園や施設との間での懸案はなかった。

②実習園の実習評価

実習園による実習評価は、総合評価として保育実習Ⅰ（保育所）は5段階、保育実習Ⅱ、保育実習Ⅰ（施設）は4段階で行われる。それぞれ最低評価は不合格となる。今年度の不合格者はなかった。

③実習訪問指導時における実習園からの指摘

学生の実習中に教員が実習園を訪問し、園長、実習指導者から実習の様子を聞く。実習の評価や実習指導上の指摘を頂くこともある。今回の訪問指導で評価された点は除き、指摘された点は概ね以下の事柄であった。

- ・実習日誌の書き方をよく認識していない学生がいる。
- ・設定保育指導案が十分に書けない学生がいる。
- ・実習において保育士として働く意思を示さない学生がいる。
- ・風邪で体調が悪いにも関わらず、マスクをして断りなく出勤した学生がいる。
- ・子どもの名前を覚えておらず、関わりを避けるなど責任ある対応ができていない学生がいる。

④高槻市配属実習の評価・伝達事項

保育実習Ⅰ（保育所）は、高槻市との協定による公立13園で行ったが、実習終了後に高槻市当局担当者から、あるいはまた担当者を通じて市保育所長会における実習評価に関わる情報を得た。市において面談を行った際に、本学科のみへの指摘ではないと断られた上で、以下の点を聴取できた。

- 4年制大学ということで短大生に比べて保育士になる目的がはっきりしていない、十分に進路が確定していないことが窺われた。
- だからこそ、それでも保育実習に行くのだから「なんでも、できることはすべてやってやろう」という気概を期待するが、そうではなく、単位を取るだけの実習になっているところもある。
- マイナス面としては、何とか「こなしている」だけの学生がいる。目的をもった実習、テーマを追求する実習生に来てほしい。
- 最近では、どこかの大学・学校も、教員が園に足しげく通う。一生懸命に努力されているのがわかる。しかしそれが学生にどこまで伝わっているか、と感ずることもある。
- 公立保育所での実習では、子ども達のモデルになる大人であることを自覚して欲しい。学生としての価値観ではなく、保育士は大人としての価値観で仕事をする。言葉遣いも「なあなあ」と子どもに話しかける実習生がいる。「ねえねえ」とすべきである。「〇〇してきて？」ではなく「〇〇してきてくれるかな？」。物をわたす時にもただだまってわたすのではない。近くまで行って「どうぞ」と言ってわたす。子どもにとって実習生との関わりは生活の学びである。学びをさせる姿勢を見せてほしい。子どもがまねをするモデルとなるように。また、公立保育所では、保育士や実習生の姿を保護者が一般市民の目で見、園ではなく行政への意見としていう。民間より厳しい目があることを意識して欲しい。

こうした指摘は、それぞれ実習指導の本質的課題を含んでいる。次期の課題であり、実習教育システム及び実習指導にフィードバックさせるべきものである。

4 考察、及び検討

(1) 実習担当者会義を中心とした R&D の方法について

①本格的な R&D 計画への助走

1年間の保育実習教育システムの立ち上げにおいて、どの程度リサーチを基盤にした実習教育システムの開発を行い得たか。厳密に言えば、リサーチ・ベースといえるほどのリサーチは行っていない。実習指導開始とシステム開発が同時並行で進むという時間的制約のなかでは、それは望むべくもなかった。適宜、最低限のリサーチを活かして開発してきたに過ぎない。その意味では、今後、ある程度の計画的リサーチのうえで、例えば他大学の保育士養成教育の動向や各種出版物の体系的な参照を続けるべきである。しかしまず、R&D 意識を維持して実習教育システムを立ち上げられたかどうかだけでも検証に値する。以下、考察したい。

②ポジティブ思考と仮説を検証する姿勢

筆者のひとり、介護福祉士、社会福祉士、保育士、看護師等の実習教育にほぼ15年携わってきた。実習教育を取り巻く環境は必ずしも順風ではない。実習には種々の問題発生がつきものであり、多大なエネルギーを要しながら報われない思いを抱くことも多い。担当者の孤立やバーナウトを見ることが多い。その結果、種々の問題点をただ否定的に捉え、処理に専念することにもなりがちである。問題が生じると、直接関わった教員のみが咎められたり、問題が個別に抱え込まれたりする。また逆に問題が発生すると教員同士の葛藤や軋轢をさけるために問題を外部に転嫁したり、責任を回避する力学も働く。その結果、実習教育システムの問題点は放置・糊塗され、一部学生や教員がスケープ

ゴート化されることもある。本来的な人づくり教育と実習目標、その成果の深化がおろそかにされ、教員、学生のなれあいにも陥りやすい。実習の心得やモラル指導がルーティン化、儀礼化することで実習教育の内容が深まらないこともままある。しかしながら、実習指導においてそうした悪循環を排除するのは容易ではない。リサーチという枠組みは、ネガティブな力動を抑制するリフレーミングとしてはたらくことになる。それは、問題に対し、つねにどのような問題が発生してもおかしくはない、しかしそれを感度良く捉え、責任をもち合理的に対処すれば問題ではないという意味転換をもたらすからである。こうして、能動的に調査を求める姿勢は、問題をニュートラルな問題として認識させ、教員は現状を客観視できる。それが柔軟な対処を導く。つまり、教員（あるいは教員集団）の自己覚知を促し、反省的視点を導く。肝心なのは、審判的視点が問題や不具合を不都合なものとして消去・処理するのに対し、探索的視点は、問題を謙虚に受け入れ課題として対応し改善しようとする点である。これが、教育カリキュラム開発にリサーチの視点を導入する本質的意義であると考えられた。

実習担当者会議では、先述したように、当初から各教員同士の視点の違い等が見られた。共通意識や合意形成がどのように進んだかは現段階では明確ではない。しかしながら、発生する問題に対して、リサーチ的に詳細を調べ、理解し、個々の教員の問題としてではなく実習担当全体の問題として対応する姿勢は定着してきた。担当者間の速やかな伝達回路が形成され、協力的な役割分担も可能となった。また、リサーチにより問題を把握し実践しながら仮説を検証し、つねに実習教育システムの開発・修整にむけて新たなシステム開発につなげていくというサイクルが、議論の仕方としても定着しつつある。今後はさらにこうしたプロセスを進め、学生もまたチームであるという意識を深めていきたい。

資料1 平安女学院大学子ども学部子ども学科 保育実習実施要領

I 平安女学院大学子ども学部子ども学科が目指す保育者像

本学部では、幅広い社会的知識とマナー、ホスピタリティーを持った保・幼・小の専門的実践者を育て社会に送り出すことをミッション（社会的使命）としている。そこで、本学部が目指す保育者像は、以下のものとなる。

- 1) 子どもの心身の発達や個性を理解し、適切な保育技術・方法を活用できる保育士
- 2) 一人ひとりの子どもにしっかりと向き合える保育士
- 3) 子どもとともに親・保護者への支援・指導にも対応できる保育士
- 4) 保育現場（保育所や施設）への社会的役割や期待を理解し、創造的に仕事を追及していける保育士
- 5) 保育を研究的に深める視点を持ち、技術の向上に努め、保育者としての自己研鑽に励む保育士

II 4年間の段階的学びと保育実習の概要

1年次、2年次…高槻市との保育インターンシップ協定により、各3日間のインターンシップ（保育所現場での体験的学び・見学観察）を行う。

2年次後半…2年次秋学期より保育所実習を中心とした事前学習を開始する。

3年次前半…3年次春学期より保育実習事前指導を行い実習に備える。

3年次後半…8月 保育実習Ⅰ（保育所）、11月 保育実習Ⅱ

3年次春休み…保育実習Ⅰ（施設実習）

III 2012年度の実習期日と実習時間

保育所実習Ⅰ（前期）2012年8月27日（月）～9月8日（土）（高槻市内配属）

保育所実習Ⅱ（後期）2012年11月7日（水）～11月20日（火）（学生個々の開拓）

施設実習 2013年2月～3月（学生個々の開拓）

*子ども学科の保育士実習は、保育所・施設ともそれぞれ10日間以上、80時間を規定している。実習園には、

期間内に10日間以上、かつ80時間の実習時間を確保していただくよう依頼している。

＊土曜日については、保育がない場合を除き登園児が少ない場合でも1日は実習を経験する。

Ⅳ 保育実習の目的と内容

実習の目的

保育所で行われる保育その他の業務に参加し、乳児、幼児への理解と保育のあり方の実際を学ぶ。保育所の機能と保育士の職務についての認識を深め、保育士を目指す者としての自覚を高める。

実習の構成

1) 保育実習Ⅰ（前期）基礎実習…観察見学実習及び参加実習を中心に行う。

＊保育実習Ⅰ（前期）では、できるだけ3歳未満児クラスと3歳以上クラスの両方の保育を経験する。

＊保育実習Ⅰ（前期）では、見学観察、参加実習を中心としながら、できる限り部分（責任）実習を経験する。

2) 保育実習Ⅱ（後期）発展実習…参加・責任実習を中心に行い保育実習を総合する。

＊保育実習Ⅱ（後期）では、部分実習を積極的に経験し、可能であれば半日実習等も経験する。

【観察見学実習】

実習場の1日の流れの把握、子ども、職員の動きの把握。子どもの集団、個別行動の様態、発達特性の理解、保育プログラムの特性理解。

【参加実習】

保育者の指導を受けながら保育に参加。教具の準備や職務を手伝いながら保育計画や環境構成、デイリープログラムの特性等を理解し、保育者としての態度、技術を身に付ける。

【責任実習】

担任にかわりデイリープログラムの一部分、あるいは半日を担当。設定保育の指導案を作成し指導を受けながら計画を実行する。

3) 施設実習…10日間の実習を段階的な課題設定により行う。

第1段階：観察実習（利用している子どもとの交流をとおして行う）。

施設の理念、目的や機能を把握していく、日々のプログラムを理解し、子どもと親のニーズ、求められる役割を把握する。

第2段階：参加実習

利用児、親への養護、支援、その他の援助の方針について理解する。

生活面における配慮、その方法について体験的に理解する。

第3段階：総合実習

職員の指導のもとに実践し、生活援助その他のサービスの特性とその体系を理解する。事例的な学びから子どもや個別課題の理解を深め、体験的な学びを深める。

実習の過程

1) 事前訪問オリエンテーション

実習開始前に実習生が園を訪問し、事前オリエンテーションを受ける。

「実習生個人票」、「実習の目標と取り組み」「訪問オリエンテーション報告用紙」を持参する。オリエンテーションでは、園・施設のガイダンス、実習準備・指導案作成に関する連絡と指導、実習上の諸注意、連絡事項を確認する。

2) 保育クラス・グループへの配属と子どもの発達理解

保育所実習では、それぞれの学生が年齢別の保育クラス・グループに配属され、発達程度とそこにいる子どもたちの特徴に応じた保育内容、保育方法を学ぶ。または、異年齢児保育のクラスに入り、発達と異年齢同士の相互作用や個々の成長に関わる保育を学ぶ。

3) 実習による保育所の役割、ニーズの特性ごとの保育、子育て支援の全体的理解

保育実習では、延長保育、障害児保育、一時的保育等の子どもたちへの保育、保護者への対応、子育て支援センター活動、地域連携など、園が行う諸活動、サービス全般についても積極的に学ぶ。実際の内容については園の方針や条件に合わせて決められる。

4) 実習指導と実習反省会

保育実習においては、実習園の指導者の指導を受ける。実習指導者との関係を適切に持ち、報告、連絡、相談を励行する。また、指示を待つのではなく自ら積極的に動く能動的姿勢が求められる。通常、実習期日の中頃に中間反省会、終了時に実習成果、評価、課題についての反省会が行われる。

V 実習ファイル：実習に必要な書類と実習記録（実習日誌）

1) 書類

個人票…実習園・施設に提出する個別プロフィール。実習用の履歴書。

細菌検査証明書…実習での感染症予防のため細菌検査を行い、無菌の証明書を提出する。

実習園訪問オリエンテーション報告書…実習事前のオリエンテーション記録

実習簿（日勤表）…実習園で出勤時に押印し、実習時間数を記入する。

2) 実習日誌

実習日誌は、毎日の実習内容とその日の実習で学び得たこと・考察したことなどを記入し、記録するものである。定められた提出時間に提出し、実習指導者が閲覧した後に、必要なコメントや助言を頂くことになる。実習日誌は実習事後の振り返り、事後指導や保育研究の素材となる。

実習記録と観察実習

実習日誌では、子どもの活動、保育場面で見聞きした事実や言動を客観的にかつ正確に記録する記述力と、その上での相互作用の分析力が求められる。また、子どもや子どもと保育士の関わりの背景、やりとり、コミュニケーションのあり方について深く考察する力を普段から養っておく。観察し、分析するためには、あいまいな視点ではなく、保育や子どもを見る基本的視点をつねに意識し、磨いておく。

VI 教員の実習園訪問指導、研究保育

保育実習中に大学の担当教員が実習園を訪問し、実習生との面談・指導を行う。また、園の実習指導者との連絡、意見交換等を行う。また、時には責任実習の終了後に、大学の教員も参加して指導計画や指導方法、実践の結果についての反省会を行う場合もある。

資料2 2011年度 実習担当者会議開催実績

日 付	事 項	日 付	事 項
2月29日	会 議	10月7日	会 議
4月20日	会 議	10月14日	会 議
4月27日	会 議	11月4日	会 議
5月11日	会 議	11月11日	会 議
5月18日	会 議	11月25日	市訪問と会議
5月25日	会 議	12月2日	会 議
6月1日	会 議	12月16日	会 議
6月8日	会 議	12月23日	会 議
6月15日	会 議	1月16日	保育科との合同会議
6月22日	会 議	2月2日	会 議
7月13日	会 議	2月10日	会 議
7月20日	会 議	2月15日	会 議
7月27日	会 議	2月29日	会 議
8月3日	会 議	3月7日	面談及び会議
8月10日	会 議	3月18日	会 議
8月24日	直前指導打ち合わせ	3月28日	会 議
9月2日	出発式		
9月10日	実習園訪問		
9月30日	会 議		

資料3 2011年度 子ども学科保育実習指導授業実施状況

回	日 付	授 業 内 容
1	4月13日	保育実習指導の意義と年間の流れ（シラバス、授業計画）、実習内容の概要（実習ノート、日誌）、レポート
2	4月20日	レポートの振り返りとディスカッション、実習テーマを深める
3	4月27日	年齢別の子どもの理解と教材作成1
4	5月11日	年齢別の子どもの理解と教材作成2
5	5月18日	年齢別の子どもの理解と教材作成3
6	5月25日	年齢別の運動遊び
7	6月1日	年齢別の運動遊び
8	6月8日	年齢別の運動遊び
9	6月15日	設定保育年齢別指導案
10	6月22日	設定保育年齢別指導案
11	6月29日	設定保育年齢別指導案
12	7月6日	施設実習について（児童福祉施設とは？ 施設実習の課題、実習先の自己選定と手続き）
13	7月13日	子どもの行動、相互作用の観察・記録
14	7月20日	観察・記録と実習ノートの書き方
15	7月27日	専門職倫理、人権の擁護、プライバシーの保護と守秘義務
16	8月24日	実習の心得、マナー、実習中の連絡、指導、事後の対応、実習評価、実習レポート、事後学習
17	9月2日	保育所実習出発式
18	9月28日	保育所前期実習を終えて（振り返りと課題の明確化）
19	10月5日	保育所後期実習に向けて（課題の確認と準備）
20	10月26日	保育実習後期を終えて（実習目標、課題の到達、実習において学んだこと）
21	11月2日	学生間での実習成果の発表と共有
22	11月9日	保育実習事後学習（実習評価と面談）
23	11月16日	保育実習事後学習（実習評価と面談）
24	11月30日	保育実習事後学習（実習評価と面談）

回	日 付	授 業 内 容
25	12月7日	保育所実習報告会（2年生への報告と申し伝え）、施設実習事前学習
26	12月14日	施設実習事前学習（実習テーマ、目標の設定）
27	12月21日	施設実習事前学習（各実習先の施設のケアと保育士・生活指導員の役割）
28	1月11日	施設実習事前学習（子どもとのコミュニケーション、アプローチ）
29	1月18日	施設実習事前指導（施設種ごとの学び、個別指導）
30	1月25日	施設実習個別指導（施設種ごとの学び、個別指導）
31	2月8日	施設実習に向けての最終注意、実習中の連絡、評価と課題、事後学習について
施設実習のオリエンテーション及び見学日程		
	7月12日（火）	Ⅲ、Ⅳ 施設見学（児童養護施設）
	7月19日（火）	Ⅲ、Ⅳ 施設見学予定（知的障害児通園施設）

Developing Practical Training Systems Designed for Cultivating Nursery School Teachers (Part 1)

— Focusing on the Concept of R&D —

Hidehiko HUKUNAGA ・ Mituhiro MATUO ・ Atuko INOUE

The Child Studies Faculty of Heian Jogakuin University has a curriculum for nursery school teachers. We have developed our practical training systems based on the concept of R&D (Research and Development). As for the management of the practical training program, we have taken a team-work approach comprising three faculty members. This paper looks over the 15-month process of developing the systems and examines whether such management systems can be made depending on the concept of R&D. The significance of R&D perspectives will also be discussed along with the consideration of relationships between a team approach and the concept of R&D. Although applying the concept of R&D to the practical training systems is by no means easy, we believe that R&D concepts create a new change-oriented framework for practical training systems. It can avoid the numerous problems that may arise in the closed systems.